

ABIC 国際社会貢献センター Information Letter

No.12 2005年3月

海外での活動

JICAよりの緊急要請／ABIC会員3名がインドネシア復興を支援 インドネシア復興支援活動に参加して	2
領事シニアボランティアについて	4
ODA関連 只今、JICA長期専門家としてインドネシアで勤務中	5
東ティモールの平和構築と紛争予防	6
ウズベキスタンでのボランティア活動	7
世界自然遺産が近くにあるアルゼンチンの田舎町にて	8
カザフスタン共和国での外国貿易実務講座雑感	9
GMS-BFの紹介とその活動—アドバイザーとしてラオスに派遣されて	10

国内での活動

「カンボジア・ビジネスフォーラム」に参加して	12
外国企業支援 国際見本市「Baby & Kids Fair Japan 2004」の通訳	12
中小企業支援 翻訳を通じて中小企業に貢献しています	13
教育 大学・オープンカレッジでの講座	14
2004年度報告：大学等への講座提供と講師派遣	14
小中高校向け「国際理解教育」	16
QUO VA DIS?—「総合的な学習の時間」の見直しについて	16
母校で国際理解講座	16
関西での活動 “海外ビジネスお助け隊—ABIC”	17
園田学園女子大学シニア専修コース講師にABIC会員26名	18
留学生支援 高校生にエネルギー・環境問題について講義	19
「交流館フェスティバル'04」に参加、日本語スピーチコンテストを開催	19
事務局便り 会員入会のお願い	20

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター(ABIC) <http://www.jftc.or.jp/abictop.html>

〒105-6106 東京都港区浜松町2-4-1
世界貿易センタービル6階 (社)日本貿易会内
Tel : 03-3435-5973 Fax : 03-3435-5979
e-mail : mail@abic.or.jp

【関西デスク】
〒552-0021 大阪市港区築港2-8-24 pia NPO 4階 413号室
Tel & Fax : 06-4395-1188
e-mail : kansai-desk@abic.or.jp

JICAよりの緊急要請／ABIC会員3名がインドネシア復興を支援

インドネシア・スマトラ沖地震とインド洋津波による被災地支援が地球規模で進められています。ABICとして被災された皆様に心からお見舞い申し上げます。本年1月に、わが国からも自衛隊900名規模の支援部隊がインドネシアに派遣されました。この活動に対する支援の一環として、ABICはJICA（国際協力機構）から、インドネシア語に堪能な人材を現地に派遣すべく人材推薦の緊急要請を受け、木倉充氏（元三菱商事）が2月5日～15日、また道廣健吾氏（元丸紅）および藤波敏夫氏（元明和産業）の2名が2月18日～3月1日、合計3名がスマトラ島アチェ州の州都バンダアチエで活動しました。

下記は、2月15日まで約2週間、現地で活動された木倉氏の臨場感のある報告です。

インドネシア復興支援活動に参加して

きくら みつる
木倉 充（元三菱商事）

2月5日から約2週間、バンダアチエの被災地に陸上自衛隊医療部隊の通訳として派遣された。以下は、その体験談である。私は、インドネシア滞在期間が長く、地方回りもしていたので、派遣されることには抵抗感や不安は全くなく、むしろ不遜ながらバンダアチエという特異地域—「イスラム色が濃い」「渡航延期勧告地域」「文民非常事態宣言地域」—に行けるという好奇心の方が大きかった。

患者への「問診」

24時間警備体制の宿舎（一般民家）に到着後、移動には警察の護衛付きという生活であった。しかし、被災地視察や連絡で移動する際に、買い物や屋台での食事の時間があり、しばしの息抜きはできた。

さて実際の活動は、医療部隊の通訳と聞いていたので、医師と患者の通訳と解釈していた。もちろんその仕事もあったが、私の仕事は患者に直接「問診」してカルテに記入し、医師はカルテを見ながら診察ということで、できるだけ簡潔かつ詳細に分かりやすくを心

がけた。当地では予め「問診」というシステムはないので、私をドクターと間違える患者が多く、「私はドクターではない。次に診察する人がドクター」と説明して



バンダアチエの救護所にて（著者）



問診

いたが、ピー
ークで1日
250人もの
患者へいち

いち説明できず、「お大事に」と答えていた。

患者は、「日本の医師の診断と薬がタダ」を口コミで聞いてきており、津波の被災者よりも慢性疾患患者が多く見られたようだ。つまり、津波から1ヶ月以上経過し、外科中心の緊急医療支援の時期は過ぎ、復興・再建の時期に入ったようだ。

通訳で困ったのはアチエ語

通訳で困ったのは、お年寄りの中にバンダアチエ独自のアチエ語しか理解できない人が少なからずおり、伝言ゲームにならないように努力し、時間がかかったことと、自分の名前を書けない患者も数多く、聞き取りで書いた名前が正しいか否か、いまだに不明であること。陸自はカルテをデータベース化しデジタル管理しているが、名前で検索できるかどうか、一抹の不安が残っている。

インドネシアには村単位でブスケスマス（診療所・保健所）という世界に冠たる医療システムがある。なにせ診察と薬がタダ。しかし医療



ブスケスマス（診療所・保健所）跡地
土台だけ残り跡形もない

機器は整っていないので、金銭的に余裕のある患者は民間病院や国立の大きな病院に行く。このようなこともあり、普通の人はレントゲンや血液分析装置まで整った陸自のテントで日本の医療を受けたいとなるのであろう。多くの患者が訴えていたことは、汚い水での水浴によると思われる「全身の痒み」、精神的なショックからと思われる「恐怖感」が圧倒的に多く、次に「下

痺」「手足のしびれ」「風邪症状」「高血圧」と続く。今後は早急に「精神的なカウンセラー」が必要と思われた。

日本のカップ麺、非常時は「豚」OK

気温40°C、湿度80%を超えることもあるテントの中で、2時間30分しゃべり続けるのが限度で、通訳の中にも体調を崩す方が出た。午前中で受付を終了し、1時すぎに宿舎に戻りインスタント食品で昼食後、しばしの昼寝となる。余談であるが、日本のインスタント食品には豚エキスを使用したものが多く、イスラムの戒律が厳格なアチエには向かないが、宗教関係者が非常時は「豚もOK」との声明を出したようだ。また、アチエは女性が外出するときは「ジルバップ」（スカーフ）を着けることが義務付けられており、着けていないと捕まる。酒は販売禁止で、陸自隊員は宿舎の艦船でも禁酒なので、フラストレーションが高まっているようだ。「豚はOK」が出たが、「酒はOK」は出ていない。

過酷な環境で、体重2kg増

夜は、宿舎でローカル料理の揚げ物や煮物が多く、材料は「テンペ（大豆加工品）」「卵」「イカ」「アヒル」「鶏」「魚」「海老」「牛肉」と豊富であるが、生野菜はない。味付けは「ココナツオイル」と「唐辛子」が定番。

このような生活をしていて困ったのは運動不足。なにせ、外出禁止で移動は車、考え方によっては、うまいローカル料理を食べて寝るだけと言えないこともない。数多くの方々が「熱中症」と「下痢」に苦しめている中で、2kgも太ったのは運動不足以外考えられない。確かに、環境は苛酷でマラリア、デング熱、アメーバ赤痢等の感染症が心配されたが、幸い宿舎や陸自のテントには蚊やハエ、ネズミ等のベクター（感染源）が少なく、飲料水だけに気を付けていればよかったです。看護師からは「1日2ℓ」水を飲めと指示が出ており、1,500ccの経口保水塩入りのボトルを持ち歩く毎日であった。ちなみに、私が飲んだ薬は、整腸剤、ビタミンB剤だけであった。

自衛隊輸送艦「くにさき」で一泊

関係者のご配慮で輸送艦「くにさき」で1泊する機会が与えられ、大型ヘリで片道15分、夕食は「生野菜サラダ」「牛乳」「ハヤシライス」を堪能、温水シャワーで汗を流し冷房完備の船室で1泊、女性通訳には特別



柱が多く、構造がしっかりしているため、モスクは残っている

の部屋が準備されており、至れり尽くせりのアレンジに通訳一同大感謝。医療部隊には女性自衛官もおり、看護師、薬剤師の仕事をされていた。ちなみに医療部隊の医師は全員男性であった。

再建・復興に向けて

バンダアチエは再建・復興の時期を迎え、まずは「道路」「教育」「医療」が重要と思われ、日本に対する期待も大きい。仮設住宅の建設も進んでおり、各避難所からの移転も始まろうとしており、再建・復興に向けた大きな動きが出始めている。特に西海岸線の道路整備が完了するまでは時間がかかるが、その間、ヘリ輸送やホバークラフト（水陸両用の高速艇）による輸送が極めて重要となっている。

水もミネラルウォーターは豊富にあるが、買わなければ手に入らない。物価も上がっている。

被災者の心のケアを

余震も続いている、「また津波が来る」とのデマが飛び交いパニックになる。人々の心の不安は大きくなるばかりと感じる。

バンダアチエ市内は平らな町である。被災地を観察したときにショックを感じたのは「高台がない」ことであった。海岸から内陸に数kmは高いところがなく、30mを超える津波が襲ったら逃げられない。いまだに瓦礫から死体が発見され埋められている。両親と離ればなれになった子供がモスクやNGOの施設や避難所で遊んでいるが、ようやく話すことができるようになった子供が、両親の名前や年齢・住所を言えるようになったと聞いた。

キリスト教会に保護された孤児を、イスラム教徒が「奪い返しにゆく」話も聞いて、宗教問題の根深いことを知った。変な方向に向かないように祈るだけだ。

日本は「顔の見える援助」が重要な要素となってい



国際緊急救援隊（JDR）医療チームの診療所の看板

るが、人々の心に通じる援助をすれば結果として「顔の見える援助」になるわけで、労働者をどんどん雇って「道路でも」「住宅でも」作ればいいのでは…と思いつながら6時間遅れの帰りの飛行機に乗った。

領事シニアボランティアについて

在フランス日本国大使館
領事シニアボランティア 領事相談員
うらべ しげゆき
上部 重行(元ト)

商社マンとして主にアフリカ向けの輸出ビジネスを担当していた私は、長いアフリカ駐在から帰国した2003年、定年を前に会社を早期退職し、現在は在フランス日本国大使館で、領事シニアボランティア(SV)の領事相談員として勤務しています。

まだこの耳慣れない領事シニアボランティアとはどんなものなのか、ご存知でない方も多いのではないかと思い少し述べてみることにします。

ABIC Information Letterに、JICAのシニア海外ボランティア活動報告が掲載されていますが、領事SVはその外務省版とも言えるかもしれません。しかし、仕事の中身は当然ながらだいぶ違っています。

領事SVは、外務省改革の一環として在外公館の窓口・領事業務を向上させるために、海外で実務経験のある中高年の民間人を、在留邦人の多い国の公館に派遣している制度です。領事SVが配置されている都市は、上海、香港、ソウル、マニラ、バンコック、シドニー、ロサンゼルス、ニューヨーク、ロンドンとパリの10ヵ所の在外公館（大使館・総領事館）になります。とか



豪華なパリの冬空



事務所での筆者

く「不親切」「対応が冷たい」と不評が根強い大使館の窓口・領事事務の改革・イメージ新がその目指すところです。

2003年に創設されたこの制度に、公募で60代を中心
に中高年581人の応募があったそうです。選考試験を
経て、男性9名と女性1名（44歳～66歳）が採用され、
先に述べた世界10ヵ所の在外公館に10名が赴任しまし
た。

大使館（外務省）の仕事は、外交、政治、経済など国民と接することの少ない業務が多く、何をしているのか理解されにくい面があります。しかし領事業務は、ほとんどが海外在留邦人や日本人旅行者と日々の接触を通して行われるだけに、国民の大使館（外務省）への評価は領事業務を以って決まるとも言われる程です。国民とともに歩む外交を目指すには、国民との接点の大きな領事業務がいかに大事であるかが指摘される所以です。



修復工事中の凱旋門

婚・離婚届け、死亡届けまでおよそ人生の万般に関わりがあります。

その他、旅券、戸籍・国籍、査証、各種書類の証明、援護・支援、日本人学校、在留届け、一般相談事項（医療生活事情、教育事情、人生相談等）から在外選挙の登録・投票に至るまで、まさに日本人の冠婚葬祭（いわゆる、ゆりかごから墓場まで）に携わります。

海外で暮らすとなると心配事や苦労は避けて通れません。言葉の問題、生活習慣の違いから起こるトラブルや不安、悩みは日本以上に厳しいものです。大使館は日本人が海外で危険な目に遭ったり、問題があるときに相談を受け、必要であれば保護、援護します。

トラブルに巻き込まれた人や、悩みがある人から話を親身になって聞き、問題解決のきっかけやヒントを考え、元気づけ励ましのアドバイスを行うのは相談員の役目。問題を共有し、同じ立場で一緒に問題の解決に努める。国民感情に疎くなっていた外務省のお役人意識ではなく、民間の普通の感覚と目線で在留者や旅行者に接し、応対する気軽な相談相手を目指しています。この健全な常識の意識改革と実践が、国民に顔が

向いたサービスとして現在外務省改革に求められているのだろうと受け止めています。

これまでの企業人生、海外体験が領事相談を通して社会に還元でき、少しあ人のためになると思えば商社に身を置いていた者としてやり甲斐のあることです。その意味で領事SVはABICの活動に通じる社会貢献だろうと思います。

シニアの世代になり自分の人生を語り、価値観を次の世代に伝え引き継ぐ事は意義あることです。シニアのアドバイスが生き方のヒントを与え、問題を抱えている人に、立ち直るきっかけを与えるかもしれません。ボランティア活動は社会への恩返しにもなるのです。

世の中の役に立ち、人から感謝されるボランティア活動は、シニア世代の社会貢献の場でもあります。領事相談員をしていて、謙虚に人の話を聞き、誠実に接する事の大切さなど、まだ学び教えられることが多くあることを実感する毎日です。

人生のベテランである我々シニア世代、まだまだ元気に頑張りましょう。シニアの活躍に期待しエールを！

只今、JICA長期専門家として インドネシアで勤務中

インドネシアJICA長期専門家
地場産業振興アドバイザー

黒川 智水（元ニチメン）

2003年6月にABICより推薦を受け、7月経済産業省技術協力課のscreeningを経て8月から約1ヵ月間JICAの赴任前研修を修了後、10月にジャカルタへ赴任した。私の勤務先はジャカルタにある工業省内で、施策課題は地場産業振興アドバイザーとして中小企業育成に尽くすことにある。勤務期間は2年間である。

言うまでもなくインドネシアの地場産業は、ほとんどが中小企業の域までも到達していない零細手工業と言ってよく、これらを育成するためにはあらゆる面からの支援が必要である。私はデザイン手法の啓蒙による産業力の向上（デザイン振興）およびマーケティング手法の強化支援（マーケティング振興）という二つの切り口で対応することにした。

活動内容を、具体的に事例を挙げて説明する。



1. 地場産業振興セミナー等での講演

地場産業振興策実施の一環としてセミナーが非常に大きな役割を果たしている。2004年6月にJCC (Jakarta Convention Center: 国際会議が行われる一級会議場) にて工業省主催の国家レベルのセミナーが100名の参加者を得て開催され、講演およびパネル・ディスカッションが行われた。議題は「WTO加盟によるクウォータ制度廃止に伴う繊維産業の対応策」で、繊維産業の先輩国日本代表として私に講演およびパネル・ディスカッションに参加要請があった。インドネシアの繊維産業は中小企業が大半である。中国という巨人にどのように対抗していくか、インドネシア政府も世界各地に赴任している商務官を呼び戻しパネル・ディスカッションに参加させる熱の入れようで、私も講演とパネ



講演する筆者

ル・ディスカッションで十分意見を述べた次第である。このセミナーはマーケティング振興の側面から役割を果たした。

2. バリ国立芸術大学で講義

インドネシアでは国立芸術大学はバリとジョクジャカルタの二つしかない。デザイン科の学生は卒業すると多くが地場工芸品の中小製造輸出業に就職する。日頃、大学ではデザインに関するコンセプトやら制作プロセス、デザイン史などを教えていたが、私が講義した現実的な市場に受け入れられるデザインやら市場構造などを聴き、今まで知らない世界を知ることができたと、むしろ学生より教授陣が驚嘆の声をあげ拍手喝采をしてくれた。私としては大学というのはアカデミックなことを教えるところと承知していたが、かくも現実離れしているとは思いもよらなかった。

3. 啓蒙セミナー「Marketable Design for Japan」を企画・実施

私がイニシアティブをとり、企画、実行した自己完結型セミナーをJICA-Netという衛星高速回線を通じたI/T遠隔講義を活用してバリで実施した。JICA-Netは日本の市場専門家・権威者・学者など多忙で遠隔地へ赴くことができない講師が、東京のJICA本部にて大型スクリーンを通じ遠隔講義できるもので、視覚性と双方向性がありデザインの講義には最適である。当方このJICA-Netを使い世界銀行グループで民間部門を担当する国際金融公社IFC (International Finance Corporation) とコンソーシア



セミナーのオープニングスピーチをする筆者

ムを組みこのプロジェクトを推進した。

セミナーの議題は「Marketable Design for Japan」とし、アパレル、家具、手芸品につき日本の市場権威者による日本市場の趨向性に関する講義、質疑応答をリアル・タイムで行った。セミナーはソフトを持っているJICAが主導で推進、IFCは場所、設備、昼食の供与という裏方の役割分担とした。

それにしても私の商社時代には、コンソーシアムでプラント商戦に臨んだ際、欧米がプライム、日本は客先接待やホテル・飛行機の予約、せいぜい機器搬送などの裏方の立場に甘んじてくやしい思いをしたが、今回の共同事業はわが方が主役となり世の中も変わったと感慨を新たにした次第である。

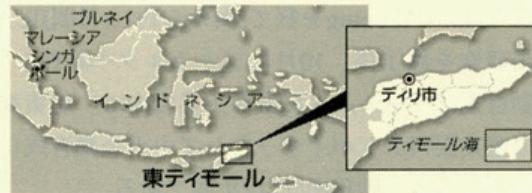
このセミナーの参加者は50名を予定していたところ130名が押しかけ、大変な盛況となった。日本語新聞、英字新聞の全国版Jakarta Postや地場の新聞紙上にセミナーの模様が大きく掲載された。

赴任後1年余りが経ち、政策推進活動にも充実感が出てきた。私の勤務も残り半年余りとなってきたが、今後も精一杯任務に力を尽くしていきたいと思っている。

東ティモールの平和構築と紛争予防

JICA専門家
前大統領府財政・金融アドバイザー

たかおか じゅんじ
高岡 淳二 (元 東京銀行)



東ティモールといえば「治安問題」がまず頭に浮かぶようであるが、1999年秋以降国連軍が展開しており、私の勤務中に「治安」で緊張したことはなかった。しかしながら、1999年の騒擾時にインドネシア国軍と共に謀して建物やインフラを破壊し尽くした東ティモール人「民兵」は島の西側（西ティモール）に逃げており、今年半ばに予定される国連軍撤退によりこれら旧民兵が東側（東ティモール）で騒乱を惹き起こす懸念は残っている。



筆者離任の当日、グスマン大統領と



1999年騒擾の後の廃墟が現大統領府「灰の宮殿」。屋根は焼け落ちたまま、雨漏りはしそう

首都ディリ市内の小学校の教室
1999年騒擾により窓枠は焼け落ちたまま

東ティモールにおける平和構築・紛争予防は国際的にも稀有な成功例とされているが、東ティモールの紛争とはインドネシア軍の軍事介入・強制併合とこれに対するレジスタンスの歴史であり、東ティモール内の民族紛争といった色彩は薄い。また、1975年のインドネシアによる軍事介入はベトナム戦争における苦い経験等を時代背景に「東ティモールの独立がその共産化、キューバ化を招く」とする西側の懸念があったことを忘れてはなるまい。

私はJICA専門家として1年間東ティモールに派遣され、大統領府財政・金融アドバイザーの任にあって親しくグスマン大統領に仕えた。今の東ティモールは独立後間もなく立法・行政・司法といった国家の基礎・基盤を作る時期にあり、工業は皆無、農業も前近代的と経済について多くを語れる状況はない。経済統計はまだ整備されていないが、大統領が「世界でも最も貧しい国の一一つ」と語るのは的を射ていよう。インフラの復旧整備・衛生の改善と医療の普及・教育の普及という経済基盤作りを行っている時期にある。

このように世界の最貧困に位置付けられ、国造りの年間所要資金2億5,000万ドルの8割は国際援助(grants)に頼らざるを得ず、現在は国連・世銀の指導もあって国際社会が期待するクリーンな国造りに邁進している。一方、ティモール海では天然資源(主として天然ガス)開発が進捗しており、国家財政はいずれこの収入で賄われることが見込まれている。しかしこの財政基盤の強化はアフリカの新興産油国が陥っているOil Curse(「油の呪い」、即ち非効率かつ恣意的・利益誘導的な財政支出)に逢着する危険性も内包している。

財政自立は国際的内政干渉からの脱却を意味するが、その

後の資源配分をめぐる国内の利害対立が不平不満の火種となる懸念を否定できない。平和構築は事後のプロセスであるが、天然資源収入の配分は今後の純粋な国内政治プロセスであり、これに国際社会が介入・干渉するのは一義的に内政干渉となろう。2006年、2007年には選挙の季節を控え、政治の常としてOil Curseの懸念は払拭し難いが、レジスタンス闘争を戦い抜き、常に民衆の利益を考え、政治的には多党制民主主義を信奉し、そして清貧に徹するグスマン大統領の個人的「権威」と国民からの絶対的信頼を背景とした彼の指導力に期待したい。



日本NGOの農業教育センターで子供達と踊りに興じるグスマン大統領



大統領府前庭で餌を探す野良(?)豚の親子

ウズベキスタンでのボランティア活動

JICAシニア海外ボランティア
銀行システム構築

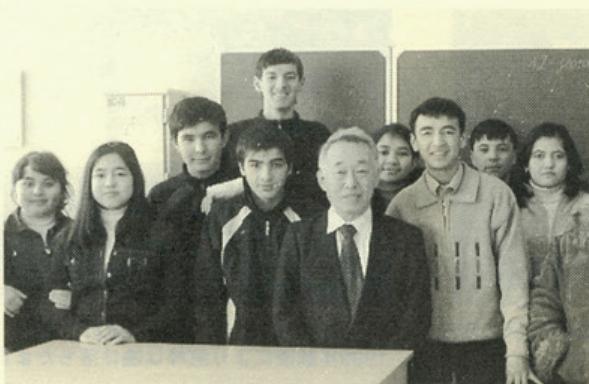
ひらた かずお
平田 一男 (元三和銀行)

2003年11月から中央アジア・ウズベキスタンの首都タシケントにJICAから派遣され、ボランティア活動に携わっています。ウズベキスタンは中央アジア5カ国のうちのひとつで、人口は2,500万、面積25万㎢、14世紀にこの一帯を統治したティムール帝国の首都サマルカンドがあった国です。

私の指導科目は同国のが「銀行システム」構築で、現在、3カ所で講義を行っています。



海外での活動



Bank Collegeの学生たちと

第一は、当地の高等教育省所管の「Bank College」です。ここは将来、銀行など金融機関への就職を希望する学生のための3年制の学校で学生数は約2,700名、カレッジといっても学生は年齢が15歳から18歳、日本でいえば高校生です。したがって学生は会社勤務の経験はありません。ここでは金融、銀行経営、銀行実務、起業論（entrepreneurship）などの科目を担当して週10時間の講義を行っています。

ウズベキスタンは1991年の独立以降、市場経済化を進めていますが、隣国のカザフスタンなどに比べるとその進展は遅れていて、IMFなどの評価は芳しくありません。銀行は数こそ33ありますが、ソ連から独立



Bank College校舎前にて筆者



Bank Collegeサマルカンド校での講義風景

ありません。また商売は現金取引主体で、小切手、手形は使われていません。まだマネーサプライのM1（通貨発行量）の数字すら公表されていませんが、M1に対するM2（預金通貨を含めたもの）の割合もかなり低いと推定されます。

したがって学生にWorking capitalの概念や銀行の信用創造を説明するにもたいへん苦労します。

第二は国立大学のUniversity of World Economy and

Diplomacy国際金融学部で週4時間の銀行論の講義です。ここは2005年2月から講義を開始したばかりですが、学生は優秀な学生がそろっていると聞いていますので期待しています。

そして最後が企業経営センター（The Center of Corporate Governance）での講義です。ここでは国営、民間の企業の社員を対象にしたセミナーが開催されていて、やはりこの2月から講義を始めたばかりです。週2時間の財務管理の講義で、1クラス15人程度の少人数を対象にしたセミナー形式です。

なお当地へは第2次大戦の終戦直後に満州から多数の日本人抑留兵が移送されてきて、各地で建設活動に携わりました。そのひとつに国立の

オペラ・バレエ劇場のナボイ劇場があります。

この劇場はタシケントまで強制連行された抑留兵約450人によって建設され、1947年に完成したものです。レンガ造り、ビザンチン風外観の3階建ての建物は1,400の客席を擁し、これまでに数々の名公演が行われてきました。建設後、半世紀を経た今なおタシケントのシンボルとして壮麗な姿を見せています。



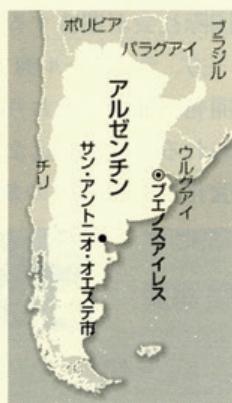
ナボイ劇場

世界自然遺産が近くにある アルゼンチンの田舎町にて

JICAシニア海外ボランティア
アルゼンチン水産資源開発

ふじた しげる
藤田 滋（元三井物産）

1年派遣で2004年4月に着任。アルゼンチンの愛すべき大田舎のサン・アントニオ・オエステ市のリオネグロ州立海洋生物水産研究所に配属され、日本の水産商売・水産事情のアドバイスをやっています。同市は、南西大西洋に続くサン・マティアス湾に面し、この湾の南には世界遺産で有名なバルデス半島があり、クジラ、アザラシ、ペンギンなど野生動物たちの楽園です。





研究室にて 気仙沼をPR

サン・マティアス湾は、日本市場向け好適水産アイテムが残念ながら乏しく、また、人口より食育牛数の多い肉食天国のアルゼンチンでは、水産業は内需向け一次産業というよりも輸出産業の位置付けができますが、JICAのSVとして国際交流・草の根運動的魚食活動食育活動にも励んでおります。

配属先研究所は州の機関で同じ施設内に漁業取締局も併設され、サン・マティアス湾の底引トール船許可数11隻の航行状態が常にGPSモニタリングできる近代



研究生・大学生・職員の箸の練習

機器も保有し、環境保全資源保護型水産業が日夜肃々と行われている様は、日本の漁業者も見習う点が多いと思います。また、国立コマウエ大学水産学部の演習実験施設でもあり、研究員や漁業取締官も二足の草鞋で、大学で海洋生物学や海洋学の教諭（なんと博士が6名）を務めています。日本の各県の水産試験場もこのような合理的組織改革を行うことで指導研究教育食育啓蒙組織に生まれ変わることも可能かと思います。

さて、12月に入り、普段はひっそりしたわが町の様子も変わりました。同じ行政区にあるラス・グルータスが海浜リゾートに生まれ変わり、3ヵ月間は、スペインのコスタデルソル状況となります。幼少期の神戸深江浜や横浜本牧浜を思い出し毎日この海水浴場に日参し、すっかり日焼け爺となりました。

日光浴をしていたら半ズボンに肩章付き制服を着用し警笛と大きな双眼鏡を持った若者が近づいてきました。なんとGuarda Ambiental（環境監視員）です。こ

の湾の南は世界自然遺産のバルデス半島に続いています。なんだか小員を知っている様子。コマウエ大学のガストン君とファンパブロ君です。学生の運動会や焼肉パーティー（Asado）にも顔を出しているので、この東洋からやってきた自分達の父親のような親爺をからかいに来たようです。1ヵ月で200ペソのバイト、学卒新人が400～500ペソですから生活実感から言えば邦貨で10万円程度の給与でしょうか。海水浴場とは言え、環境監視員として正しい目的で双眼鏡を必ず使用するように親爺らしい教育的指導をしました。彼等も笑っていました…。

小員の拙文は此處にも掲載中です。

JICAのウェブサイト

http://www.jica.go.jp/yokohama/jigyo/tayori/tayori_21.html

みやぎ国際交流

http://www.pref.miyagi.jp/kokusai/koryu/yume-taishi/report/report_fujita_s.htm



海水浴場



環境監視員と

カザフスタン共和国での 外国貿易実務講座雑感

JICA短期専門家

いのくち よしひろ
井口 義弘（元 伊藤忠商事）



2005年1月に、JICA（国際協力機構）専門家の肩書きで、カザフスタン共和国、アルマトイ市のカザフ経済大学に設置されている「カザフスタン日本人材センター」で、ビジネスパーソン24名に対して外国貿易実務を講義しました。



2005年1月20日、アルマティ商工会議所で講演後、副会長室で右からビヤロフ副会長、筆者、アキルバイバ海外経済情報部長、王井政彦JICA専門家

カザフスタンは旧ソビエト連邦の構成国で、1991年に分離独立し、現在、市場経済化に邁進しており、西欧、米州、アジア等との交流により国家発展が望まれている。石油、ガス、貴金属等の地下資源に恵まれており、資源開発、産業発展のためには外資および経営のノウハウ導入が鍵と言える。

アルマティへの直行便は日本ではなく、北回りでフランクフルトで1泊し、東方〔中国の西南〕に逆戻りしてやっとアルマティに到着する。500トンの巨体に550人を乗せて、地球を駆け巡るANAのジャンボ機から下の果てしない無人の大地を見て、「地球の懐の偉大さと、人間の叡知」に感激。地球上に63億の人、人口が増えれば、食糧不足、環境汚染で人口抑制云々されているが、人間が住んでいる場所は地球表面の5%以下? にすぎない。「地球汚染防止・改善」と富裕国家と貧乏国家、世界全体のGDP分配等々、経済的に恵まれる人が恵まれない人を助ける心を持ち、政策と実施さえすれば、何も騒ぐ必要はないと確信した。

さて、本題の「外国貿易実務講座」であるが、これはいかにして市場を開拓し、客先を見つけて契約し、貨物の手配、通関、船積み、決済、クレームの処理、貿易金融、外国為替などを通して、いかに効率的に、輸出・輸入から妥当な利益が得られるかの学問であり、この点が同国では一般的に理解されていないようだ。『貿易論』はありえても、『貿易実務論』はありえない、内容は全て細かい手続きも含めたミクロの学問の典型である。それだけに内容を省略しすぎると、単なる紹介になりかねず、9章からなる膨大な内容の『貿易実務全般〔初歩〕』を50頁の英語版テキスト“MECHANISM OF INTERNATIONAL TRADE”と添付資料を70頁にまとめるのに苦心した。

カザフスタンの貿易は、ロシアおよび旧ソ連邦から分離独立した中央アジア諸国が主な相手で自由圏の貿易とかけ離れており、国内取引に近い。今回講義を通じて貿易実務の概要要点、通常の貿易の概念と英語力とリーガルマインドが、貿易には必須条件と分かってくれたことが成果と確信する。

超美人通訳のELENA（日本からの訪問者、女優?が、「彼女の優雅さと美貌には敵わない」と言ったとかの逸話がある）が、5日間にわたり毎日3時間、貿易実務講義およびアルマティ商工会議所での講演「世界市場の鳥瞰図、JETRO、JFTCおよび総合商社、日・米間経営環境格差」を一生懸命ロシア語に通訳してくれた。

零下18度のカザフスタンには、加湿器など商売の種は転がっている。企業進出はLNG（電気・電子製品）、Hyundai（自動車）などの韓国勢が先行しているとの印象を受けた。

また、往路フランクフルトから7時間の機中、隣に座ったのは30歳代半ばのアルマティ市民の美人で、西欧での社内会議の帰途とのこと。名刺交換したところ、アメリカンエクスプレス銀行のアルマティ事務所長であった。流暢な英語をしゃべり、機内ショッピングで香水、装身具2、3点を約500ドル現金で支払うのを見た。旧社会主義国のカザフスタン（一人当たりGDP 1,500ドル）でも、高等教育を受けて英語ができる人は外資系企業に勤めて高収入を得ており、貧富の差が生じているように思われた。

GMS-BFの紹介とその活動 —アドバイザーとして ラオスに派遣されて

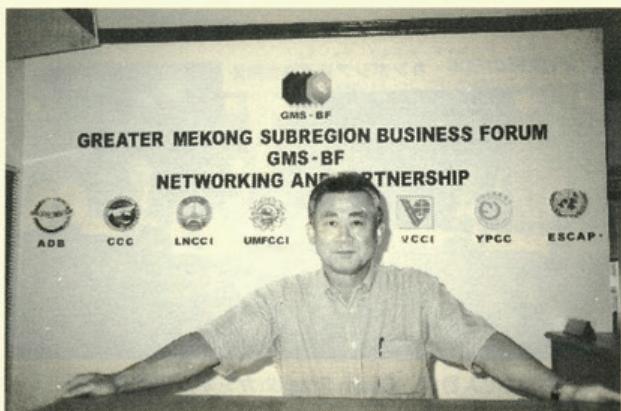
ジェトロGMS-BF専門家

小泉 清司（元大丸）

2004年7月中旬より、ジェトロ専門家として、GMS-BF (Greater Mekong Sub-region - Business Forum) の事務局があるラオスの首都ビエンチャンに約6ヵ月間派遣され、12月24日に帰国した。最近GMSという言葉をよく耳にするが、この



GMS-BFのご紹介とその活動を簡単に報告させていた



GMS-BFの事務局にて

だく。

従来のメコン流域4カ国（カンボジア、ラオス、タイ、ベトナム）にミャンマーと中国雲南省を加えた6カ国（正確には5カ国と1地域）で構成されたGMS地域では、東西・南北回廊などのインフラ整備は進められているものの、各国毎の市場は小さく、各々単位での経済成長の可能性は限られている。このため同地域での貿易手続きの簡素化・透明化の推進やビジネス関連情報の整備・普及を図ることにより地域内外の企業の誘致や貿易を活性化し、市場を統合することが期待されて、ADBのGMS経済協力プロジェクトの一環として、2000年10月に大メコン流域ビジネスフォーラム（GMS-BF）として域内の各商工会議所で組織された。

各国の商工会議所の代表が年次総会で1年間の計画を策定し、同席するドナーであるADB（アジア開発銀行）、UNESCAP（国連アジア太平洋経済社会委員会）の承認を得て、これらの活動計画を実行する。この活動を円滑に推進するために事務局（GMS-BF Secretariat）が、域内の中心に位置するビエンチャンに設置され、現地人の事務局長と数人のスタッフが、貿易・投資促進のための情報発信を行い、ニュースレターの発行、セミナー・見本市開催の手助け等をする。会長は任期2年の持ち回り制で、現在はミャンマー商工会議所のウインアウン副会頭である。事務局の業務活動経費は、各々商工会議所や会員である民間企業からの年会費と、ADB、UNESCAPからの援助金で賄われている。

本誌11号（前号）にて紹介があったごとく、このGMS-BFよりジェトロに対し、同事務局に専門家を派遣し、事務局の活動を支援・強化して欲しいとの要請に基づき、2003年度に貿易投資円滑化支援事業（JEXSA）の一環として派遣が決定された次第である。

専門家の主たる活動は、上記の目的を実施するための事務局運営の全般的指導（On the Job Training）を行うことで、他には加盟企業へのインタビュー等によるニーズの把握や問題点の抽出、そして周辺国日系企業との交流機会を提供することなどであった。

具体的な活動としては、7月15日、ビエンチャンのGMS-BF Secretariatに着任、8月中旬よりミャンマーと雲南省の商工会議所や現地・日系企業の視察、9月初旬からはベトナム、カンボジア、タイへの各商工会議所や現地・日系企業の視察。その後はビエンチャンでの企業訪問等の活動が主であったが、11月11日より3日間は、バンコック日本人商工会議所のGMS委員会が主催されたミャンマー・タイ東西回廊視察ミッションに参加、11月20日にはカンボジアのシアヌークビルで開催された第5次年次総会にも出席した。

12月15日にはタイ商工会議所と在タイ日系企業を対象とするGMS諸国、特にラオスへの投資を誘致するセミナーをバンコックで、翌16日にはベトナムのホーチミン市で日本人商工会議所のメンバーを主な対象としてADB経済回廊の専門家を招聘してセミナーを開催した。

振り返って見れば、2004年5月下旬頃、ABICからの本件専門家派遣案内をメールで見て、こんな目的もハッキリしない難しいものとパスしていたが、ABICのメコンデスク担当者より薦められて、開き直りで赴任させていただいたが、いい経験になり勉強させていただき、充実した半年間であった。

今後の活動については、引き続き2005年度も専門家を派遣するようADBやUNESCより日本側に要請がきている。

ありがとうございました。



GMS諸国への投資誘致セミナー（2004年12月15日 バンコック）

「カンボジア・ビジネスフォーラム」に参加して

元JICAカンボジア商業省アドバイザー

せきもと よしげ
関本 喜茂 (元トーメン)

2004年12月21日、22日、東京・浜松町の世界貿易センタービルにて(社)アジアクラブは、カンボジアのCham Prasidh商業大臣を招聘し、カンボジアへの投資促進の観点からビジネスフォーラムを開催した。筆者はABIC吉川メコンデスク・コーディネーターと共に企画の段階から参画したのでその概要を報告する。



このフォーラムには、コーディネーターに今川幸雄元駐カンボジア大使、オブザーバーとして高橋英明駐カンボジア大使のほか、外務省、経済産業省、JICA、日本貿易会、国際協力銀行等のカンボジア関係者が参加した。

商業大臣の基調講演では、カンボジアの社会・経済の現状は投資家にとって十分魅力的なものになっている、即ち、①政治的安定性、②マクロ経済の安定性、③健全で透明性のある、また予見可能な法制度、④最貧国に与えられた貿易優遇制度(GSP/MFN)による主要マーケットへのアクセス、について言及し、カンボジアの投資環境は確保されているとの主張を展開された。

さらに大臣は、このような投資環境で日本の投資が来ないのは理解できない、投資家は未だに地雷、クメールルージュへの恐怖、政治体制の不安定さ、法整備



右から2人目は、Cham Prasidhカンボジア商業大臣

の不備、汚職などを心配しているのではないか、と分析された後、これらの心配は投資家の杞憂であると述べられた。

これに対し現地に長く駐在した筆者としては、FDI(海外直接投資)不振の原因は別のところにあるのではないかと考えている。

一つの重要な事例として、カンボジアは農業国であるにもかかわらずベトナムから野菜、果物などの農産物が毎朝、プノンペンの中央市場にトラック7~8台分持ち込まれている。カンボジア市民が、少し高くてもベトナム産野菜を購入しようとするのは、品質の良さと食品安全性に対する意識があり、裏を返せばカンボジア産野菜に安全の信頼性が欠如していることの証といえる。この事例はカンボジアの実態を表しており、農産物の自給、さらには輸出を目指すためには、食品の規格の制定、品質の安全性、標準化に関する法整備と品質認定機関の創設、職員の育成など、産業基盤の確立に焦点を当てた地道な基礎固めこそ求められているのではないかと思料する。カンボジア政府と投資促進を議論する前提として、カンボジアの産業基盤整備に関する、関係者の問題解決の方向性についての共通認識が必要ではないかと感じたフォーラムであった。

国際見本市「Baby & Kids Fair Japan 2004」の通訳

ふじた けいこ
藤田 敬子 (元 欧州系投資銀行)

2004年11月17日から19日までの3日間、東京ビッグサイトで開催された「Baby & Kids Fair Japan 2004」という国際見本市で、オーストリア企業のために日英通訳を務めた。

このお話をABICからあったのは「国際社会貢献セン

ター」という名称が私の頭から消えかかっていた11月初旬ごろであったが、ABICのコーディネーターの方に前もってオーストリア大使館の商務部へ案内していただけで、担当者から直接説明を聞くことになった。

同国企業の主要製品は「パシファイア」だと言われたので、それは何かと尋ねたら「おしゃぶり」だと答えたが返ってきた。頭の中に「Pacific Ocean (太平洋)」が浮かび、動詞の「Pacify」は「太平にする」であるから、名詞の「Pacifier」は「平安にするもの」、すなわち「しゃぶると気持ちが安らかになるもの」なのだと納得がいった。準備期間も十分だったので、同



筆者（オーストリア企業のブースで）

大使館から借用した資料を十分に検討することもできた。このようなABICの配慮には感謝している。

展示会初日は、早めに家を出て、あらかじめ伺っていたとおりJR浜松町駅でバスに乗り換え、30分ほどバスに揺られながら、両側に広がる東京湾の濁った水を横目にしているうちに、東京国際展示場に着いた。バスを降りてガラスと鉄骨でできた大きな建物に足を踏み入れ、広い空間をひたすら展示場をめざして歩き、やっとロフトのような展示場にたどり着いた。

ちょっとした手違いはあったものの、開場時には同国企業の展示担当者である30~40代のドイツ人男性とオーストリア人女性と初めて挨拶を交わすことができた。展示品の説明を受け、来場者への説明や両者間のやりとりを通して通訳しているうちに大方の仕事の内容は把握することができた。午後になると、同社の責任者に

加えすでにお会いしていた大使館商務部の担当者も顔を出したので、ブースはいっとうドイツ語圏と化していた。

同国企業の製品は小児科医や歯科医、オーストリア大学デザイン科などとの協力のもとに研究・開発され製造されたもので、小児の頸や歯の健全な発育を促すことに重点の置かれていることが強調されていた。豊かな少子国をマーケットとし、価格は製品に見合った線を崩さず、毎年デザインを変えているとの説明だった。確かに納得いくいく製品であり、配色も良く、小児の健康および情緒の発達にかなった製品であるという印象を受けた。ブースを訪れる人は小売業者、保母さん、小児科医、看護師、ドラッグストア店主等さまざまであったが、これら製品に強い関心を示し、評判は上々であった。

同社は製品展示しながら日本総代理店を募集していた。応募者は初日からぼつぼつ現れ、活発なやりとりが何度か展開された。2日目になると、代理店ではなく合弁相手を探す方向へ方針が変更された。結局、3日目の午後、同じ展示場で米国の輸入品を扱っていた馴染みの日本企業と合弁契約の具体的な交渉に入り、話はほぼ煮詰まったようだった。

今回の通訳業務の経験から、私はオーストリアとドイツの違いに気付き、オーストリアの歴史と文化に新たな関心を抱くようになった。このような機会を与えてくださったABICに深い感謝の念を表してこの報告を終わりたい。ありがとうございました。

う仕事をめぐるいくつかの点について自分の感じていることを述べさせていただく。

まず、どこの企業でも、翻訳などというものは、単に機械的にやれば済むもので専門家に任せておけばよく、それよりも中身の方が重要だという見解で、この部分に必要以上の時間と労力を費やしてしまい、原稿が翻訳者の手元に届くのが期限ぎりぎりのことが多い。中身が重要なのは当たり前であるが、さりとて翻訳者は機械ではなく、書かれている内容を十分咀嚼しながら訳文をつくるなければならない。しかも、相手先に届くのは翻訳された版であり日本語の原稿ではない。従ってこの点に関しては顧客に十分理解していただきたいところである。

翻訳には辞書が必要なことは言うまでもない。自分も以前は、IT用語辞典、その他幾つも用意して机の横において作業していたが、今では全く違う。第一、辞

翻訳を通じて 中小企業に貢献しています

たか ぎ ひろあき
高木 裕昭 (元 旭化成)



ABICのご紹介で、中小企業が行っている海外取引に伴って必要とする、組立要領書、運転指導書等のマニュアル類の英訳、ホームページの英語版の作成などをやらせていただいた。多くの中小企業が、その優れた技術を有効に活用して、海外に事業を展開しておられるのに感動を覚え、自分がいさかでもお役に立つことができれば幸せと考えて、業務をやらせていただいた。

今回、若干のスペースをいただいたので、翻訳とい

書をめくるのは億劫である。また、IT用語辞典などの例で言うと、技術の進歩が早いために、数年前の版では最新の語彙が入っておらず、役に立たないことが多い。その代わり、インターネットの発達に伴い、辞典だけでなくあらゆるジャンルの情報も、同時に、しかも必要とする言語で集めることができる。仮に、自分がその分野の素人であっても、これらの資料を駆使することによりカバーできることが多く、逆にこのあたりは自分の知識欲を刺激することになるとともに、海外の文献に使われている表現になじむ機会にもなっている。

今日では、翻訳者が作成したものはそのまま企業の重要な書類になる。つまり、ファイナルである。原稿には、ワード文章だけの単純なものから、図面入りの

もの、エクセルやパワーポイントを使って複雑なレイアウトをなしているものも多い。これらに英語をはめ込もうとすると、それなりの知識とPCを扱う技能が要求される。英文はどうしても日本語より長くなってしまうのでこれを決められたスペースに上手にはめ込むかに工夫をする。このような翻訳以外の仕事で、翻訳以上の時間を割かれることさえある。コンピュータ時代の昨今、我々のような高齢者であろうと、PCとインターネットは自由に駆使できなければ受注はおぼつかない。

ABICの会員の皆様の中には、言葉に練達の士が大勢いらっしゃると思う。連絡・交流しあいながらレベルを高め、中小企業に役立つよう貢献しようではありませんか。

大学・オープンカレッジでの講座

2004年度報告： 大学等への講座提供と講師派遣

2004年度の講座提供と講師派遣状況

大学等への講座提供と講師の派遣を始めてから4年になります。2004年度もおかげさまで、大学向け31講座／440コマ、エクステンション・センター（EC）や公共の教育訓練機関は18講座／325コマとなり、143名の講師の方に活動の場がご提供できました。

この結果これまでの4年間で実質220名の方に講師としての経験を積んで頂いたことになります。それら講師の方々のご努力によることは勿論ですが、同時に日本貿易会の方々やABICの会員各位に、各大学や諸機関のお知り合いの方などをご紹介頂いたおかげであると感謝しております。

ただ、3年あるいはそれ以上にわたって継続している大学もありますが、学部長の交代による学部方針の変更等の理由で、2、3年で講座内容を変更されることも多く、年間を通じて総数を維持あるいは増加させるには、さらに新しい講座設定を増やしていく必要があります。今後ともご協力のほどよろしく願い申し上げます。

2004年度大学、EC他講座受託数一覧

	主催者数	講座数	コマ数
大学	21	31	440
EC他	10	18	325
合計	31	49	765

新しい大学（学部）との取り組み

2004年度に初めて講座提供が実現した大学（学部）は10指を超え講義内容もバラエティに富んでいます。例えば、大阪経済法科大学・経済学部の「国際ビジネス入門」（11コマ）武蔵工業大学・環境情報学部での「環境と国際企業経営」（10コマ）東海大学・文学部での「中南米諸国の実情と日本」（10コマ）に加え、宇都宮大学大学院での「国際NPO起業論」（14コマ）では、ABICそのものを国際NPOの一モデルとして、実際にNPOの現場に携わる多くの講師に講義して頂きました。また、獨協大学は2003年度に統いての講座提供ですが、講座を担当される先生が替わり、全く新しいテーマ「多文化社会のビジネスとリスク」（10コマ）での講座提供になりました。

一方、大学は同じでも新しい学部との関係を開拓したものとして、青山学院大学の相模原キャンパスに提供した「国際ビジネス入門」（通年26コマ）があります。さらに、単発に近い形ですが、東京大学・教養学部の「東南アジアに触れる」（10コマの内2コマ：タイとフィリピンをABIC会員が担当）も話題を呼びました。

大学のエクステンション・センターおよび 公共教育・訓練機関

大学のエクステンション・センターは全般的には受講生が減り、講座不成立もあって振るいませんでしたが、早稲田のEC、明治のリバティ・アカデミーで開講された「外国為替・国際金融入門」が多くの受講生を集めました。最近の傾向としては社会常識ものよりも実務・実学ものに受講生が集まるようです。

アビリティ・ガーデンでの「国際ビジネス管理」は2004年度も継続されましたが、同時に海外職業訓練協会(OVTA)での新しい「貿易業務」(134コマ)講座が特筆されます。

また、横浜産業振興公社で公社側の強い要望で「輸出ビジネスとは?」「輸出ビジネスの進め方」を講義しています。

その他の特記事項

将来に向けた活動として、講義録の作成を計画していましたが、その第一弾として明治リバティ・アカデミーでの『外国為替・国際金融入門』が完成、2月末に刊行されました。

2005年度に新設が確定している講座としては、名古屋外語大学の「グローバルビジネスの最前線—国際ビジネスマンのプロジェクトX」(通年20コマ)があります。日本貿易会広報グループの紹介によるものです。

LEC大学との取り組み

新しい試みとして2004年、構造改革特区の申請により新設された株式会社LEC大学の教育活動を支援するため、協力関係を強化し幅広くかつ長期的に講座の提供、講師の派遣等を実施していく方向が固まりつつあります。LEC大学は、2004年3月にスタートしたばかりで教師陣も不足しているところから、専任の教師陣を充実させる必要がありました。そこで、LEC大学として、2004年9月末に文部科学省に申請、2005年年明け早々に正式認可が下りましたが、ABIC会員は69名が応募し、48名(他に保留8名あり)が文科省により認定されました。

LEC大学からは、ABIC会員以外からの応募者に比べて、非常に合格率が高く、合格者との面談においても社会経験が豊かな方が多いと評価されております。合格者の中には、ABICがご紹介してきた多数の大学等で講座を持ち、講義を経験している方も多く、この講義実績が文科省の評価を高めたとのことです。勿論、そ

2004年度受託先一覧

受託事業の種類	受託先
大学・大学院 講座受託	亞細亞大学(経営) 法政大学(経営) 創価大学(経済) 獨協大学(共通) 中央大学(商学) 桃山学院大学(経営) 中京大学(経済) 青山学院大学(国際政治経済/共通) 同志社大学(商学) 北陸大学(法学・外国語) 横浜商科大学(商学) 関西学院大学(経済/総合) 宇都宮大学大学院(国際学研究) 大阪経済法科大学(経済) 武蔵工業大学(環境情報) 東海大学(文学)
大学、エクステンション・センター 講座受託	早稲田大学EC 明治リバティ・アカデミー
大学・大学院 特別講義受託	専修大学(国際交流センター) 山梨大学(教育人間科学) 創価大学(経営/総合) 東京大学(教養) LEC東京リーガルマインド大学 (キャリア開発) 東京経済大学(共通)
各種公共機関か らの講座受託	雇用・能力開発機構 (アビリティ・ガーデン) 神奈川県産業貿易振興協会 海外職業訓練協会(OVTA) 日本国際協力システム(JICS) 横浜産業振興公社 園田学園 滋賀県産業支援プラザ 兵庫県工業会

れと同時に商社OBの国際経験が「大いに語られるべきもの」として市民権を得てきた結果だと思います。

具体的にどのような活動を引き受けるかは、目下進められている個人面談などの結果を踏まえて、3月中に決まる予定ですが、専任教員以外の会員にもさらに活躍頂く機会が発掘できそうで楽しみにしています。

(大学講座グループ コーディネーター 和田 稔)

小中高校向け「国際理解教育」

QUO VA DIS? —「総合的な学習の時間」の見直しについて

日本の外（国際）というテーマは、大学に行って初めて「国際法」とか「国際関係論」「国際文化比較論」が出てくるもので、小・中・高校においては「国際」という名の付く教科は無い。従って国際理解の講義の場が無い、担当の先生もいないというのが、小・中・高校向けで私達コーディネーターの最初にぶつかった問題であった。国語・算数・理科・社会・図工・音楽・体育の各単科以外に割り当てられる時間は、ほとんどが新設された「総合的な学習」の時間である。

小・中学校には今から3年前の2002年度に、高校には2003年度に導入された「総合的な学習」は、「既存の教科の区分にとらわれず、横断的な学習を児童・生徒に提供する目的」で設けられた時間帯である。同時に教員免状を持たない一般社会人が非常勤講師として学校教育に登用される制度が発足した。

一国の国情を話す場合、地理・歴史・文化・民族・国民性・宗教・食物・音楽など色々な学科が一つのストーリーの下に複合的に綾をなして出てくる。一つ一つをバラバラに習っていた知識が、血が通うように有機的に繋がり、活性化する。子供達は普段の授業と違う感じで新鮮さをもって聞き、驚きや感動を覚え、あこがれを抱くことが感想文に書かれている。将来に向かって勉強をしようとか自分を見つめ直すとか、著しい知的刺激を受ける効果があるのである。

ところが今OECDの学力テストで日本の学力低下が指摘され、この総合的な学習の時間の見直し論が進行中である。ようやく3年にして成果の出てきた総合的な学習の芽が、再び知識偏重・詰め込み主義に摘み取られないか憂慮する。

総合的な学習の時間が減れば、テーマ別学習である国際理解教育や環境教育が減ることになるので、一方で標榜される『国際化』はQUO VA DIS? 一体いざどこに行くのか？を問いたい。

OECDのテストは一つには「読解力の低下」、つまり子供達が本を読まなくなつたことを意味し、またもう一つは「数学的応用力」の低下、つまりいざれも「国語」とか「算数」の基礎学習の低下ではなく、その応

用力の低下を意味していると理解される。「総合的な学習」は正にこの応用力の育成の場であり、単に量的に単科を増やすのではなく、むしろ質的な充実を図るべきであると思う。

基礎学科が或るテーマのもとに他の教科と複合化し、合体して出てくるのは世の中の出来事・仕事もそうである。単眼ではなく複眼的視野でものを見て、考える応用力の育成に「総合的な学習の時間」が活用されることを切に望むものである。

（国際理解教育講師派遣グループコーディネーター
藤村 登）

母校で国際理解講座

前田 喜章（元 日商岩井）

（JICAエクアドル長期派遣専門家
〔中小企業育成政策立案〕）

現在JICA専門家としてエクアドルに赴任中だが、年末年始の一時帰国休暇を利用して母校で国際理解講座を行った。

母校は平成17年度より「国際科学高校」として文部省から認定された大阪のとある高校である。

当初、授業時間外での講座を希望していたが、学校側の希望により約90分の授業をすることになった。授業となると話す内容も自ずと硬めの話になりがちだ。ただし、学生に「知識として何かを記憶してもらう」ことよりも、「海外に興味をもってもらう」ことに力点を置いて話すことに努めた。

今回の講演のテーマは、「私と国際協力」である。

まず、国際協力とは？ 国際協力を必要とする開発途上国の現状とは？ なぜ国際協力が必要なのか？ そして日本国が実施しているODAとは？ を説明した後、



わがABICの活動もいくつか紹介させていただいた。

そして、次に自分自身の体験談について、20年近く前に時代をタイムスリップさせ、商社勤務時代に携わった円借款や無償プロジェクトの話をしたり、最近ではABICのご支援を得てJICAのシニアボランティアや専門家活動をしていることなど、さらには、外国人留学生のホームステイ受け入れや、在住外国人の協力を得て始めた国際理解講座のことなど…。

できるだけ幅広く紹介することで、多くの学生の関心を集めることに腐心した。また、大人の話だけでは学生が退屈するであろうことは予想されたので、あらかじめ準備しておいたオカリナ（アンデス諸国で原住民が古くから使っていた土器製楽器）でアンデスの曲を演奏した次第である。

数日後、学校から送られてきた学生の感想文をいくつか引用させていただくと、「国際理解とは他の国を知ることであり、自分の国を再認識することだと思った」「視点を変えて見るということが大事だと思った」「国際理解に興味があって勉強したいと思っているけど、もしそういう仕事につくなら、自分で行動をおこさないといけないと思った」「今までボランティアという視点で見ていたものをちょっと違った視点から見ることができた」「言葉もお金もなくても国際協力をしたいという気持ちがあれば海外で生活をしながら協力することができるものなんだなあと思った」等々。

（所感）

時代は変遷し若者の考え方も大きく変化したが、若者の感受性とエネルギーの強さを感じさせられた一日であった。ABICの国際理解講座が生徒の関心を深め、将来国際協力活動に発展することを祈念している。

関西での活動

“海外ビジネスお助け隊— ABIC”

ABIC関西デスクコーディネーター 藤原 照明

関西デスクではかねてより活動の柱の一つとして関西圏中小企業支援を大きなテーマと位置付け、産官学連携強化に一役買うとともに、ABIC会員を東大阪クリエイション・コアや特許流通センター等々に派遣するとともに企業にも派遣してきた。

最近、このテーマを一層深化させ、(社)ニュービジネス協議会販路開拓支援事業および近畿経済産業局などに15名の会員にナビゲーターとして参加していただき、具体的支援を広げるとともに産官学連携の一環として関西学院大学がクリエイション・コアに開設したサテライト研究室マイスタースクール、ビジネスクリニックの開設記念シンポジウム（2004年11月4日開催、企業経営者約150名参加）のパネリストとして大阪府の草薙参事と共に関西デスクの藤原が参加、ABICの持つ機能および中小企業支援における産官学のあり方等々につき論議を展開し、参加者各位より大きな反響を得た。

また、2004年9月、150名の企業経営者を集めて開催された近畿経済産業局通商部主催の海外販路開拓支援セミナー「拡大するEUで新たなビジネスチャンスをつかめ」の講演会講師としてABIC会員の工樂誠之助



マイスタースクール・ビジネスクリニック開設記念シンポジウム
(中央が筆者 2004年11月4日)

氏、堀進氏が参加、独自の切り口よりEUの今後と可能性につき講演、参加者の喝采を浴びた。

その一連の流れで、12月には近畿経済産業局内会議室に参集された約50名の経営者の前で近畿経済産業局より命名された“海外ビジネスお助け隊—ABIC”の機能と活動につき藤原が講演。ABICは話すだけでなく極めて具体的に海外ビジネスを支援できる体制にあることに参加者は多いに興味を示した。

今後とも機会あるごとに産官学連携に積極的に取り組むとともに中小企業支援を着々と拡大していく所存である。関西在住会員の積極的な参加を期待しております。

国内での活動

園田学園女子大学シニア専修 コース講師にABIC会員26名

ABICでは、園田学園女子大学シニア専修コース2005年度（2005年4月～2006年1月）の国際文化学科2年生の「比較生活文化研究」24コマと同3年生の「アジア太平洋文化論」の2コマ、計26コマ（いずれも必須科目）を26名の講師によるオムニバス方式で講義を担当することとなった。

同校シニア専修コースは、兵庫県阪神シニアカレッジ（4年制）、神戸市シルバーカレッジ（3年制）等を卒業して、なお学習意欲のある人達を対象とした3年制のカレッジで、「文学歴史学科」と「国際文化学科」の2学科がある。

園田学園は昭和12年に高等女学校として誕生し、戦後、短期大学と女子大学が開設され、現在は中学から大学までの女子一貫教育を行っている。幼稚園も併設。地域市民に開放された公開講座を30年前より、また3年前には、シニア専修コースを開校している。テニスの伊達公子、浅越しのぶ両選手の母校としても有名。

1月20日、同大学で生涯学習センター所長の田辺教授および河合教授、松成部長による説明会があり、26名中23名の講師が出席し、主旨説明に熱心に聞き入り活発な質疑応答が行われた。主旨説明の中で大学側からは、補足説明的に下記要望が出された。

- ①生徒は、海外の経験も豊富、書物・インターネットで調べれば分かる知識の講義は不要。講師が経験した“生の声”“現地の生活を中心とした文化”“現地の人々の考え方・生活様式・本音”を話して欲しい。
- ②講義の後、生徒が「おじいちゃん或いはおばあちゃんはまだ大学で勉強している。今日はこんな話を聞



田辺教授から主旨説明を受ける



熱心に説明に聞き入る会員

いてきた」と孫に自慢できるような新聞・書物では知り得ない現地の話をして欲しい。

大学側では、次年度以降もABICによる継続講義を希望している。26名は、アジア・中近東・欧州・北中南米と世界各地に駐在経験を持つ講師で固めているが、人生経験豊かなシニア相手の講義は初めての経験であり、講師一同、初年度の責任の重さを痛感している。
(関西デスク 大学講座コーディネーター 赤田 堅)

園田学園女子大学シニア専修コース講師

国際交流学科「比較生活文化研究」24コマ	
中 国	相崎賢一郎（元 丸紅） 西田 健（元 丸紅） 大西 稔男（元 三井物産）
台 湾	戸川 順治（元 伊藤忠商事）
韓 国	福積 康光（元 伊藤忠商事）
ベトナム	鶴巣 武敏（元 日商岩井）
タ イ	金子 義久（元 トーメン） 高嶋 宏臣（元 三菱商事）
フィリピン	近藤 正弘（元 伊藤忠商事）
インドネシア	東井 清彦（元 伊藤忠商事）
パプアニューギニア	松村 直治（元 日商岩井）
中南米	赤田 堅（元 丸紅） 福島 澄信（元 日商岩井） 喜多 創平（元 日商岩井）
ブ ラジル	
米 国	宮岡 守（元 丸紅） 萬木 寛（元 丸紅）
カナダ	有田 捷一（元 三井物産）
ドイ ツ	工樂誠之助（元 松下電器産業）
中東欧	峯本 晴輝（元 丸紅）
フ ランス	中矢 一虎（元 住友商事）
イタリア	森田 耕造（元 伊藤忠商事）
スペイン	堀 進（元 丸紅）
中近東	小口 良喜（元 三菱商事） 眞鍋 征史（元 伊藤忠商事）
国際文化学科「アジア太平洋文化論」2コマ	
ア ヒ ー と 日 本 人	上嶋 武（元 伊藤忠商事）
ア ヒ ー か ら 見 た 日 本	曾我 典夫（元 丸紅）

高校生にエネルギー・ 環境問題について講義

関西地区大学講座コーディネーターの赤田堅氏（元丸紅）は、3年前、ABICからの推薦を受け、社会経済生産性本部・エネルギー環境教育情報センターのコーディネーターとして登録し、小中高校生を対象にエネルギー・環境問題を各校に赴き講義しています。

社会経済生産性本部・エネルギー環境教育情報センターでは、エネルギー庁からの委託を受け、当初の研修のほか毎年フォローアップ研修や見学会を実施しています。

小中高校で総合学習の一環として「いかに子孫に美田を残し得るか」を中心に、同氏は商社OBとしての海外経験をも踏まえ、地球規模での環境問題解決の重要性について、時には実験を交え、生徒と共に考え、討議し、生徒自身が解決策を見出すための土台作りを手助けしています。昨年11月26日、兵庫県丹波市青垣町の県立氷上西高校3年生28人に対し「エネルギー・環境問題」をテーマに講義した様子が、神戸新聞に掲載されました。

なお、関西地区では、新居欣造氏（元丸紅）と高

留学生支援

「交流館フェスティバル'04」
に参加、日本語スピーチ
コンテストを開催

2004年11月20日(土)、21日(日)、今年で5回目となったお台場の東京国際交流館の「交流館フェスティバル」は、快晴に恵まれ、来場者数は3,000人を数えて大賑わいでした。

ABICは本年も参加し、活動紹介展示ブースを設けるとともに、日本文化教室の成果を披露し、茶道教室は茶会、華道教室は生け花の作品展示と実地指導、書道教室は留学生の作品展示、空手は模範演武を行いました。今回特筆すべきは、「日本語広場」を受講している留学生を中心とした「日本語スピーチコンテスト」



第二章 教育技术与教育评价

丹波市青垣町の水上山高
校で二十六日、エコ
十環境教育情報セミナ
ー（東京）の登録講師
亦田堅さんなどが「エ
ルギー・環境問題」を
「マニ講義した。物理
学が三年生三十八人が
地球温暖化などについて
えた。

で、海外駐在歴二十年の元商社マン。授業は一部構成で行われ、前半はアルゼンチンなどの写真を紹介しながら現地人について話した。後半は、暖化を食い止めるためどうしたらよいかを生徒と議論。「日本は温泉が出るから地熱発電がない」、「ソーラー発電も環境に優しいやう」など生徒は活発に意見を出していた。

外部講師招き 環境問題学ぶ

高西上冰

的に国、自治体などの協

A black and white photograph showing a man in a dark suit standing at a podium in what appears to be a lecture hall or classroom. He is facing an audience whose backs are to the camera. In the background, there is a chalkboard with the words "União dos" partially visible. The room has rows of desks and chairs.

環境問題について話す赤田さん＝水上西高校

嶋宏臣氏（元三井商事）の両氏も同コーディネーターとして活躍しています。（ABIC関西デスク）



を開催したことです。吉田理事長の開会挨拶の後、初級・中級・上級合計12名の留学生やその家族などが、慣れないながらも精いっぱい日ごろの成果を発表、観客約100名の声援も飛び交い終始和やかな雰囲気のうちに進行しました。12名の発表終了後、賞品の授与、野津事務局長の講評を以って締めくくりました。初回のコンテスト実施のため、準備段階、審査方法等に課題を残しましたが、関係者のご協力により好評裡に終了することができました。

(留学生支援担当コーディネーター 山田 雅司)

会員入会のお願い

国際社会貢献センターの運営費は、会員の皆様から頂く会費で賄われております。今後ともさらなる会員の皆様のご援助、ご協力をお願い申し上げます。

種類	内容	年会費
正会員	センターの活動を推進する個人、法人及び団体。 (理事会の承認を得て入会)	法人及び団体 一口 50,000円
		個人 一口 10,000円
賛助会員	センターの趣旨に賛同し、会費を納める個人、法人及び団体。	法人及び団体 一口 10,000円
		個人 一口 5,000円
活動会員	センターに登録し、センターの事業に参加しようとする個人。	不要 一 一

正会員

団体・法人(17社)	(社名五十音順)			
〈10口〉 (社) 日本貿易会 丸 紅 (株)	伊藤忠商事(株)	住友商事(株)	双日ホールディングス(株)	
〈6口〉 (株) トーメン	三井物産(株)	三菱商事(株)		
〈4口〉 (株) 日立ハイテクノロジーズ	豊田通商(株)			
〈2口〉 稲畑産業(株)	長瀬産業(株)	阪和興業(株)		
〈1口〉 協同木材貿易(株)	興和(株)	JFE商事ホールディングス(株)	蝶理(株)	
個人(4名)	(敬称略・氏名五十音順)			
池上久雄	小島順彦	寺島實郎	宮原賢次	

賛助会員

法人(2社)	(社名五十音順)			
〈1口〉 (有)イーコマース研究所 (12月20日入会)		キーリサーチネット(株)		
個人(294名)				
下記は2004年11月以降ご登録、お申し込みいただいた8名の方 (敬称略・氏名五十音順)				
〈2口〉 井口義弘 小寺真行				
〈1口〉 石橋満 伊賀豊和 伊東泰 澤田豊治 田邊肇 藤井則雄				

活動会員 1,467名

(2005年2月28日現在)

賛助会員・活動会員ご入会は、当センターホームページ (<http://www.abic.or.jp>) 「賛助会員・活動会員入会案内」の申込書にご記入のうえ事務局宛郵送いただきますようお願い申し上げます。

お問い合わせ先：Tel. 03-3435-5973 Fax. 03-3435-5979 扇、道家

e-mailアドレス・住所等の変更届けはお忘れなく！

e-mailアドレス・住所などの変更がありましたらご連絡ください。
転居先不明で返送される例が増えてています。

e-mail : mail@abic.or.jp FAX. 03-3435-5979